引揚者となる人たちと歌の場面

――外地居留時、抑留時、避難時、引揚船内で、そして戦後日本社会で

そのとき歌い、そのとき聴いた〈そのⅡ〉

藤川琢馬（会員）

6．朝鮮人養父母に育てられた満洲孤児

終戦当時小学校6年生だった満洲孤児・竹川（養子先の姓）英幸さんは朝鮮人に助けられ、成長して朝鮮戦争に駆り出され、数奇な境遇を経て帰国する（竹川英幸『帰りの道は遠かった』）。

昭和13年英幸さん5歳のとき、一家は長野県開拓団として、満洲・三江省樺川県に入植した。父は昭和20年8月根こそぎ動員で牡丹江に応召し、終戦で、母が英幸さんを頭に6人の子どもを連れて哈爾濱に向けて避難した。8月30日ごろ、近くの高粱畑のそばで休んでいたとき暴徒に襲われ、英幸さんは頭を強打されて気を失った。母は、下の5人の子どもを守るためにはその場を離れるしかなかった。このとき、英幸さんを助け育ててくれたのが朝鮮人の養父母となる人であった。英幸さんは養父母に連れられ、38度線に近い養母の里に行き、そして終戦の翌年ソウルに移り住む。1950年6月25日朝鮮戦争が勃発し、養母は南に脱出したが、養父は空襲の誤爆で死去した。中学4年の英幸さんは再び孤児となり、兵隊に駆り出された。

戦線で、味方の宣撫工作隊の拡声器から「アリラン」が、次いで「トラジ」のメロディーが流れた。郷愁を誘うメロディーによって、人民軍将兵の投降を勧誘するものだった。その後、手榴弾に吹き飛ばされて負傷、入院した陸軍病院を脱走、再び兵隊に、そして大邱市の憲兵学校、陸軍歩兵学校に入学し、休戦協定が締結される前年、まだ10代だったが陸軍少尉に任官した。

アリラン
アリラン　アリラン　アラリョ
アリラン峠を越えゆく
私を捨てていくあなたは
十里も行かずに足が痛む

朝鮮民族を代表する歌としてよく知られている「アリラン」は南北共通の朝鮮民謡であることから、間接的には南北統一を願う歌といえる。2000年シドニー・オリンピックの開会式では南北の選手団が分断後初めて、統一旗を持って入場した。このとき、バックに流されたのが

「アリラン」だった。なお、南北分断の悲劇と重なるもう一つの悲劇、日本から朝鮮への〝帰還事業〟は昭和34年に始められ、当初の2年半に集中して、合計9万3340人の在日朝鮮人と日本人配偶者が北へ渡った。ある面、中国残留日本人の帰国問題と重なる、胸痛む事象である。

英幸さんが昭和50年帰国し、肉親との再会を果たしたのは、「中国残留孤児の父」と呼ばれる山本慈昭氏（1902～90）の尽力による。氏は出家・修行し、長野県下伊那郡阿智村で、住職として生涯の大半を過ごした方である。昭和20年、阿智村から満蒙開拓団を送ることになり、国民学校の教員を兼ねていた氏は教師役として渡満するが、わずか3か月で終戦となり、シベリア抑留の身となった。昭和22年帰国したものの、待っていたものは妻と娘の死。そして、阿智村開拓団215名のうち帰国できたのはわずか13名、また教え子51名のうち6名に過ぎなかった。氏は中国残留孤児の肉親捜しを決意、訪中し、あるいは行政に働きかけたが、ことは容易には進まなかった。

昭和44年、開拓団生存者の一人が死去するその2日前、引揚げのとき子どもたちの命を救うため中国人に引き渡し、山本の長女および教え子たち15名が生存しているはずだと証言した。昭和45年、機会あるごとに新聞やテレビで孤児たちの存在が報道され、昭和47年日中国交正常化を機に「日中友好手をつなぐ会」が結成された。山本は私財を投じ、会員のなかで、「岸壁の母」として知られる端野いせも協力した。この年、肉親との再会第一号が実現し、昭和55年までに177名の身元が判明した。そして昭和56年以降30回にわたって、厚生省により残留孤児の集団訪日調査が実施された。のちに竹川英幸さんは、この会の大阪支部長を務めた。なお平成25年4月、阿智村に「満蒙開拓平和記念館」がオープンした。長野県から最も多くの満蒙開拓団員が送られたし、阿智村は山本氏ゆかりの地であった。

引揚げ時にわが子を託したのは中国人だけでなく、朝鮮人もいたことがわかる。しかし、養父母となった朝鮮人の場合、中国人の場合以上に子どもの素性を隠し、明らかにされないままで終わっているケースが多いのではなかろうか。〝朝鮮〟の孤児はもっと多くいたのではないか、そして朝鮮戦争にも係わっていたのではないか。

7. 中国残留二世が希求する日中の平和友好

現在も厚労省の関係で、日本に定住帰国した満洲残留孤児の方々の支援活動に携わっておられる石山聆子（れい）さんは、いわば中国残留二世に近い。父君は台湾人音楽家・董清財（とうせいざい）氏で、満洲の音楽学校教師であった。建国10周年のとき、「満洲建国十周年慶祝歌」が公募され、自作が当選、満洲国から東京音楽学校に留学派遣された。しかし終戦後の中国で、董氏が台湾人であったこと、ならびに慶祝歌入選の栄誉を担ったことにより、一家は波乱に富んだ足跡をたどることになる（以下、林ひふみ「満洲国の台湾人と日本人、その戦後」）。

董清財氏は1906年高雄州に、代々漢方医を家業とする裕福な家庭に生まれた。音楽に強い関心を持っていた清財は日本の武蔵野音楽学校に留学するが、卒業後台湾に帰らず、大連で教師となり、1935年満洲・吉林市の高等師範学校の助教授となった。清財の妻となる日本人吉崎ヨシさんは、1913年新潟県蒲原郡加茂町で出生、生家は裕福な木材商で、地元の高等女学校を卒業後、東京の

日本女子体育学校に進学した。教員免許を取得して地元の小学校、女学校で教師となったが、１９３８年24歳で単身満洲に渡り、新京の小学校で音楽兼体育主任の教師となった。１９３９年、満洲国政府による体育講習会がヨシの勤務先小学校で開催され、ここに清財が吉林から参加して、二人の交際が始まった。翌年結婚して１９４０年長女董聆（石山聆子さん）が生まれ、以降全５人の子をもうけた。

「十周年慶祝歌」は名誉ある当選歌であり、董清財一家のその後の方向に大きく係わった作品であったが、満洲国崩壊後の中国では、作曲したことは一切隠さなければならなかった。また台湾人であることにより、国共内戦の目まぐるしい渦のなかだけでなく日中関係のなかでも、一家がどの道を選択するか、容易ならざる状況にたびたび遭遇した。中華人民共和国成立後、および文化大革命のもとでは、思想改造や社会主義への貢献を強要され、そして１９７２年日中国交正常化が成るも、日本への出国が許可されたのはヨシだけであった。１９７６年５月、ヨシは年末までの予定で訪日するが、その間清財は胃がんにより70歳で死去する。

１９８２年、ヨシと５人の子どもたち、およびその家族16人が日本に定住帰国した。当初は生活保護を受けたが徐々に自立を果たす。長女は既述のように残留孤児を援護する仕事に、次女、三女は音楽教師（それぞれピアノと声楽専攻）になった。波乱の40年余りを中国東北部で過ごしたヨシは、１９８８年東京で死去した。

董清財氏が１９４２年４月から２年間、東京音楽学校に留学して、一家が東京・原宿に住まったとき、長女董聆は１～３歳であったので、彼女は事実上、中国（東北部）育ちである。終戦後、一家は中国に残留を余儀なくされた。董聆は13歳で家を離れ、中国における音楽の最高学府・天津の中央音楽学院に学んだ。一家が生き延びるためには社会主義体制に沿って生きるほかはなかったが、１９６６年文化大革命が始まると、清財は「建国十周年慶祝歌」を作ったことが文化漢奸とされ、自宅は紅衛兵により徹底的な捜査を受け、楽譜ほか大切にしていたものは没収され戻らなかった。清財自身痛めつけられ、子どもたちも反革命とされ、董聆は天津の軍農場で４年半労働を科された。董聆は、中央音楽学院で音楽理論を学び、卒業後北京音楽出版社に勤務し、作曲家の夫と結婚して長男が生まれたばかりであったが、乳飲み子をヨシに預けたまま、一度も帰宅を許されなかった。長男董真海と、ピアニストとして英才教育を受けた次女董韻も河北省保定の農村に下放され、養豚や開墾に従事した。父に声楽を仕込まれた三女董恒は京劇女優になる夢があったが、中学の途中で工場労働者になり、音楽を学ぶ機会を再び得ることができたのは10年後であった。

１９８２年一家が日本に定住帰国したとき、石山聆子さんは42歳、一家の足跡や自身の半生を顧み、国家や民族の枠を超えて平和を希求する気持ちが強い。この気持ちは中国残留日本人たちが共通に、「肌で感じている」願いであろう。石山さんはその希望を表したく「世界大同の理想」という曲を作った。できるだけ多くの人に歌ってもらいたいと念願している。本稿に楽譜を添えた。

世界大同の理想

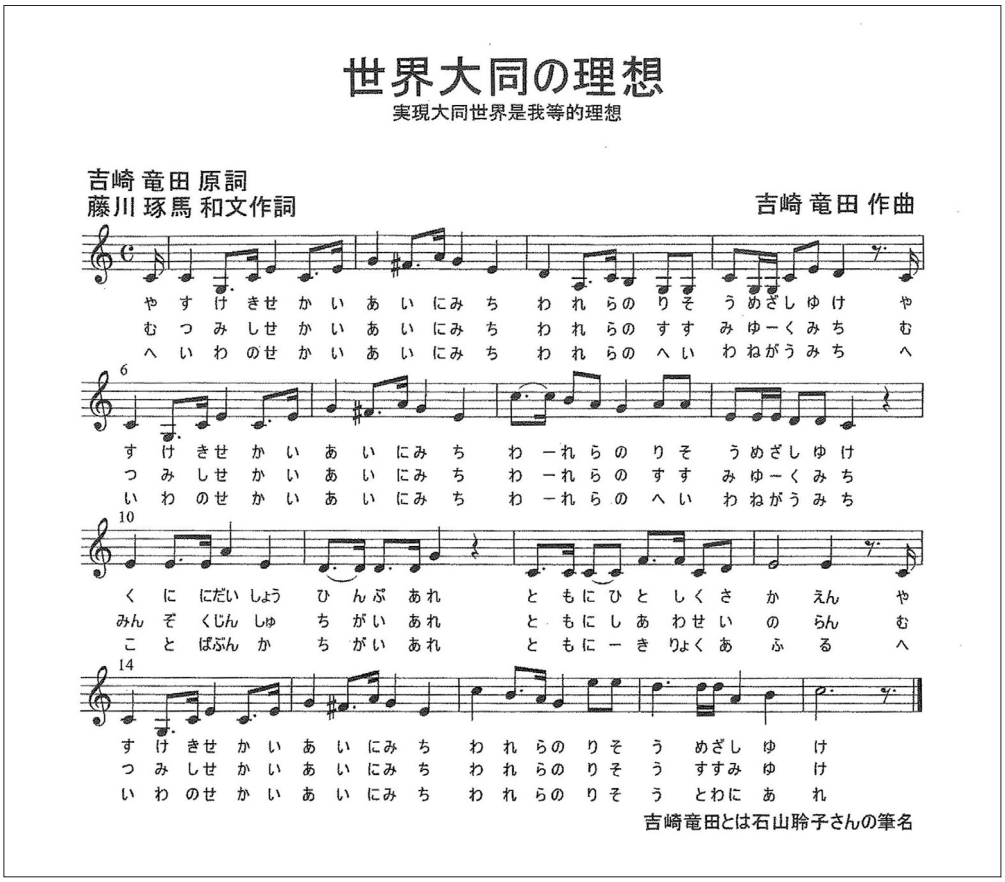
１　安けき世界　愛に満ち
　　我等の理想　目指し行け
　　安けき世界　愛に満ち
　　我等の理想　目指し行け
　　国に大小　貧富あれ
　　ともに等しく　栄えん
　　安けき世界　愛に満ち
　　我等の理想　目指し行け

2

睦みし世界　愛に満ち
我等の進み　行く道
睦みし世界　愛に満ち
我等の進み　行く道
民族人種　違いあれ
ともに幸せ　祈らん
睦みし世界　愛に満ち
我等の理想　進み行け
平和の世界　愛に満ち
我等の平和　願う道
平和の世界　愛に満ち
我等の平和　願う道
言葉文化　違いあれ
ともに気力　溢る
平和の世界　愛に満ち
我等の理想　永遠にあれ
（日本語作詞　藤川琢馬）

3

「大同」とは、日本語表現としては保険会社名以外に大同小異や大同団結と四文字熟語としてしか使われないが、その意は広く深い。『広辞苑』によると、大勢が一つにまとまること、天下が栄えて和平になること。またその世、とあり、さらには博愛、平等の思想も含まれる。満洲国成立時の元号でもある。中国育ちの石山さんだからその意を十分に解し、大同なる表現をもって私たちに伝えている。日本語にあってほしい言葉である。



なお、ヨシ一家の次男吉崎真光さん（1947年生まれ）は、還暦を過ぎてから、父董清財の血を引いて、歌を創作するようになった。一家の数奇な境遇や、残留孤児の心に想いをよせ、養父母への恩は山よりも重く、とてもお返しできませんという次の歌である。

本稿ではメロディーの記載は省くが、きわめて中国風である。35年間中国において生活し培われた音感であるから当然であろう。

歌詞にある〝養父母〟を、自身を育ててくれた〝中国〟と置き換えれば、根は日本、育ちは中国という、残留孤児と同じ関係である。

恩重如山、無以報答

1　根（先祖）は日本に在り、養父母の家は中国に在る
　年月が過ぎるのは、水流のように早い
　葉が落ち根に帰るが、養父母を思うと涙が出る
（養父母と）離れたくない、それぞれ別の天に遠く離れているが
　それぞれ別の天に離れているが
　戦争はとても怖い、家族はみなばらばらになってしまった
2　年老いた養父母は私を慈悲の心で引き取り
　苦労して育ててくれた
　その恩は山よりも重く、とてもお返しができません
　お返しができません
（日本語訳　石山聆子）

8．満洲っ子の心をつなぐ満洲唱歌

元日銀副総裁藤原作弥さんの一家は、教師である父君の仕事の関係で、昭和17年新潟から北朝鮮に、そして昭和19年春、ソ連国境に近い興安街に移り住んだ。終戦間近いころ、ソ連軍侵攻の報に接して昭和20年8月10日、当時8歳だった藤原さんは父親の軍官学校職員家族とともに、女・子ども・年寄りが中心の総勢150人の集団となって、興安街を汽車で脱出する。そのときある生徒が無蓋車の上で、興安嶺の山々と草原に別れを告げるため歌を歌おうと呼びかけ、「♪兎追いしかの山～」と歌いかけた。そのとき誰かが、「それは日本の歌だ。ボクたち満洲の歌を歌おう」と提案し、「♪寒い北風吹いたとて　おじけるような子どもじゃないよ　満洲育ちのわたしたち」と、満洲唱歌「わたしたち」を歌い、……次から次へ満洲の歌を歌った。……この歌は学校の往き帰りによく合唱した歌で、「君が代」より大切な愛唱歌だった（藤原作弥『満州、少国民の戦記』）。

外地でよく親しまれた歌は、引揚げたあと思い出の深い歌となり、共通の思い出の歌となる。「わたしたち」などの満洲唱歌は、引揚げ後「満洲っ子をつなぐ歌」として、満洲の小学校に在学した人たちの同窓会や地縁の会で必ず歌われる。

「わたしたち」はとくに、〝満洲っ子〟であることを意識させる特別な歌で、内地っ子には通用しない（させない）。「わたしたち」には北風、雪、リンク、スケート遊びなど、満洲ならではの歌詞があるだけでなく、直接的な表現「まんしうそだちのわたしたち」があって、満洲っ子だけの歌である。

わたしたち

1　寒い北風　吹いたとて、
　おぢけるやうな
　子どもぢゃないよ。
（繰り返し）まんしうそだちの
　わたしたち。
2　それに雪さへ　降ったとて、
　たまげるやうな
　子どもぢゃないよ。
3　風の吹く日は　外に出て
　リンクをまはろよ、
　スケート遊び。
4　雪の降る日も　外に出て、
　みんなでしませう、
　雪投げしませう。
（作詞・作曲　園山民平）

藤原さんは、「♪柳の棉の飛ぶ頃は黄色いほこりもかすみます　乗れ乗れ小さなロバの上　夕日の古塔を見に行こか」（「やなぎの春」）を、「♪風の姿（すがた）はおもしろい　雪の原のは銀の風　砂の岡のは黄（き）いな風　桃の里では赤い風　草の山では青い風」（「風」）をと、憶えている歌詞を記し、「夕日」（正確には「赤い夕日」）

も暗誦（そら）んじていると記す。

藤原さん一家を乗せた列車は8月13日、朝鮮との国境に近い安東に到着する。安東は満洲では一番日本に近く、安全だと思われていた。ここで玉音放送を聞き、9月6日ソ連軍を迎えた。一家はこの地で正月を、そして1年2か月の避難生活を過ごすことになる。

9．満洲っ子も内地と同じわらべうた

私の姉の高校における同級生・水橋晶子さん（終戦年8歳）は、外交官だった父君がシベリアに抑留され、母とともに、病死した弟の骨壺を首にぶらさげ、哈爾濱から引揚げた。満洲時代に親しんだ歌をお尋ねしたところ、その一つに「♪いちれつらんぱん　破裂して　日露戦争　始まった～」という数え歌を連絡してくださった。はて、もしかしてと思い出したのが、かつて母から聞いたわらべうたである。2006年のころの聴き取りで、わが家の終戦後までの足跡を手記にまとめていたときだった。その折に楽譜として書き留めたのが次の数え歌である。改めて歌詞などについて調べたところ、「いちれつらんぱん」は「一列談判」（異説あり）で、手毬唄やお手玉唄として、戦後1950年代まで歌われたことがわかった。終戦の前年に帰国した知人・田中朋子さんもこのわらべうたを挙げ、あとで〝談判〟とされたとしても〝らんぱん〟だといい、よく歌ったという。子どもの遊び唄に戦後まで、日露戦争勝利の余波が残っていたのは面白いが、子どもたちの遊びは現在とは違っていて、まだこんなものだったのかと、当時が偲ばれる。田中さんは「イチリットラー」（手鞠唄）も憶えていて、挙げてくれた。このほかよく歌われたわらべうたには尻取り唄「乃木大将」や数え歌のお手玉唄「日清戦争」などがある。

一列談判（一～十の数え歌）
いちれつらんぱん（談判）破裂して
日露戦争　始まった
さっさと逃げるは　ロシヤの兵
死んでも（死ぬまで）尽くすは
　日本の兵
五万の兵を　引き連れて
六人残して　皆殺し
七月八日の　戦いに（は）
哈爾濱までも　攻め込んで（寄って）
クロパ（ポ）トキンの　首を取り
東郷元帥（大将）万々歲（十でとうとう大勝利）

（尾原昭夫編著『日本のわらべうた　室内遊戯歌編』）

〈歌詞解説〉①歌詞は十一以降も別資料には見受けられるが、割愛。②日清戦争の際死んでもラッパを離さなかったラッパ卒・木口小平（きぐちこへい）の話は修身の教科書に載り、広く知られた。③五から七までは単なる数字合わせ。④哈爾濱までではなく、実際は奉天まで。奉天大会戦では日露両軍60万人が激突し、日本軍は限界であったのにロシア軍は哈爾濱に撤退し、クロパトキンは罷免された。⑤東郷は当時大将。海軍大将が出てくるのはおかしいが、時とともに変わったのであろう。

私は、私の年齢前後の人が集う、地元の郷土史関係のある小さな集まりでこの唄を話題に出したところ、歌詞にバリエーションはあったが、みなさん知っていた。つまり日本中の子どもたちが歌って遊び、満洲の子どもたちも同じ遊びに興じていたのであり、児童の遊び文化やその伝播の観点から興味あることである。

（つづく）